



「居直って行なう」のと

「自己保身で行なう」のは

チョツとちがう

新しいことや、苦手なこと、また重要な仕事を前にすると、どうしてもひるんでしまう。失敗したら、ケガをしたら、恥をかいたら...など、心配の種は尽きない。

子供の頃に恐れる失敗といえ、受験や恋愛であろうか。学生の時に味わった失恋のショックは、それまでの私の人生で、最大・最強のショックだった。相手から全人格を否定されたように感じて、生きていくあてもなくさまよっていた。恥をかいた、否定された、一生ひとりモンだ、失格者だ、から始まって、自分とは何か？人生とは？などと哲学的悩みまで発展する。

社会に出ても、失敗の恐れは数多くある。結婚、子育て、離婚、家庭不和や、仕事の安定、健康に関する恐れもある。

では、今のままの状態が一生続けば幸福か、と言えば決してそうとも言えない。良い大学にいきたい。良い結婚がしたい。良い就職、仕事の成功、良い家に住みたい。など夢は数多くあるが、それらはすべて、変化することを意味している。

夢、成功、幸福は、変化のなかにあるが、失敗の恐れもまた、変化にある。

一方、これらの変化のほかにも「自分を変える」という変化もある。

高校生の頃、友達とギターバンドを作って、初めて人前で演奏した。いくら練習したとはいえ、本番ともなると、緊張で手は汗ばみ、膝はがくがくして、頭の中も真っ白になる。逃げ出したい気持ちを抑えて、エイヤッと演奏する。終わってみれば、まあまあの評判でホッとしたことがある。

また、スキーを始めた頃は、転んでケガをしたら...と怖くて滑れないでいると、「初心者のうちは、ケガをすることはまず無い

から大丈夫」と言われ思い切って突っ込んでいった。スキーに限らないが、少し慣れた頃にケガをするものらしい。

変化を求めて、新しいことにチャレンジするときは、エイヤッと「居直って行なう」ことも、案外効用があると思われる。ずるずると現状を続けることは、失敗の恐れをなくすつもりでも、夢や成功の道をなくすことにもなりかねない。

ところで、変化を求めて「居直った」はずなのに、しばらく慣れてくると、「居直り」が「自己保身」にすり替わることがある。ギターのコンサートで、格好よく見せようとする、かえって間違えたり、スキーなどは、ちょっとした気の緩みが、大怪我につながることもある。

せっかく変化の中に身を投じておきながら、慣れてきた辺りで「自分の変化」だけは、拒否しているのだろうか。

自分を変えるということは、思いのほか難しいようだ。自分が一番抵抗するのは、失恋したり、仕事をなくしたりすることよりも「今までの自分を変える」ことかもしれない。

「居直る」ということは、ある意味で「今の自分」で勝負するということと言える。だが、これは自分は変わりたくないという「自己保身」ではなかったはずである。変化に臨むときに、自分の準備が万全ということなどありえない。かといって、準備が整うまで待っていたら、チャンスを逃がしてしまう。となれば、とりあえず「今の自分」で勝負を賭けるしかない。その結果エイヤッと「居直る」わけだが、「居直る」のは変化のきっかけ作りであり、その後の自己変革、自助努力を怠ると、演奏を間違えて観客席からブーイングが起こってくる。

失恋がつくった天才哲人 上村慎二郎